

湘

6
2019

湖南文艺出版社



兰径



抱

卵

能村 研三

みちのく二往復

このたびの十連休、前半にみちのくを二往復する旅に出かけた。

一回目は四月二十五日から一泊二日で、岩手支部の指導句会と、大畑善昭さんの第二句集『一樹』並びに評論集『俳句の轍』の出版記念会のために花巻を訪れた。会場は昨年東北大会を行った花巻の志戸温泉のホテルで、坂上田村麻呂が発見した温泉と言われ、裏手を流れる豊沢川の清流のせせらぎの聞こえてくるところである。昨年はこの川越しに朴の花がたくさん花をつけているのが見えたが、今年は朴の木は芽吹き始めたばかりで、その代わりに遠くに市川では見納めとなった満開の桜を見ることができた。

夜は大畑さんの出版記念を兼ねた懇親会となった。大畑さんの第一句集は私が俳句を始めた頃に出版された『早池峯』で、以来四十年ぶりの句集、八十の齢を越えられ東日本大震災の前の年までの作品を収められたものである。これ以降の作品を集めた句集もいずれ準備されるとのこと、登四郎の高弟の一人でもある大畑さんの果敢な句業に畏敬の念を覚

ひとり来て 田植仕度の始まりぬ

余花の風育苗箱の列正す

寂たるは受粉終りし梨畑

いささかの出来ごころあり苗木買ふ

さくら薬降り深追ひはせぬことに

穀雨なり躑歩きしてみたし

抱卵の気の澄みわたり御代うつる

鯉幟目指すは灘の力潮

ご朱印を肅然と待つ木の芽雨

返礼に筍僧が掘りくれし

えた。

翌日、花巻の帰りに北上の日本詩歌文学館で平成の時代に亡くなった俳人の企画展を観た。登四郎の〈掌に宇宙も掴み蟻も掴む〉の短冊と、林翔の〈一花だに散らざる今の時止まれ〉の色紙が展示されていた。

二回目は一日おいた二十八日から一泊二日で宮城県の加美町（旧中新井田町）へ、詩人の宗左近が作った縄文記念館の閉館を惜しむイベントに参加した。新幹線の古川駅で待ち合わせし、時間があったので、沿岸部の石巻の日和山へ連れていってもらった。石巻は東日本大震災で大津波が押し寄せた所で、町を一望する山の上に立ってみた。展望台には震災以前の写真が掛けられており、いかに街全体が大きく変わり果てたかがわかった。ここには長崎から沖の同人の円城寺清さんが単身で復興のお仕事をされているところでもある。

翌日、加美町の中新井田ではまぢ中を練り歩く火伏の虎舞の行事も見ることができた。

考古学

森岡 正作

作務僧の鋤を休むる初音かな
觀光船島の桜へ舵を切る
囀や骨に始まる考古学
広重の線とも違ふ春の雨
しがらみも絆も似たり蝌蚪の紐
白羽の矢なら討たれたき万愚節
空なかに定点のあり雲雀の野

苗足して

今年もまた田植の季節がやって来た。わが家では業者任せで、五月の連休の後半と決められているが、草刈などを怠っていると、近所の長老に「どうせ遊びで米作ってんだべえ」と笑われる。

先日は、畦繕いの人に「いつ植えるの」と声をかけたら、「いやあ、ここの三日の寒さで、苗が風邪引いちまってさあ」と言う。確かに四月中旬は暖かく、苗が順調に伸びていたのである。苗が「風邪引く」とは、私のような素人にはとても出でこない言葉である。

登四郎先生に「苗足して来て廻りけり水田べり」という句がある。実によく農の姿をとらえていると感心してしまふ。私などは、田植を中心とした多くの句材が、目の前にあるというのに詠めない。

田植が終わると、今度は「水争い」が始まることと思う。いわゆる我田引水であるが、「水盗む」という季語を使うチャンスでもある。

能村登四郎の軌跡〔10〕

能村 研三

地の冷えをあつめ一樹の桜濃し

『民話』昭45

昭和三十六年に新居を建てて十年、庭の広さもほどほどで登四郎は自分なりの庭作りを楽しんだ。材料を買ってきて私に手伝わせながら藤棚を造ったこともあった。庭の東西には自ら植木市で買ってきた二本の牡丹桜の苗を植えた。桜も染井吉野ではなく、濃い紅の牡丹桜の妖艶な美しさを楽しんだのも登四郎らしさであろう。染井吉野より開花が十日ほど遅いものの気候も未だ寒く地も冷えていた。この句について「こうしたものを詠むにも何十年という歳月がかかるものだ」と述懐している。

曼珠沙華天のかぎりを青充たす

『民話』昭45

昭和四十五年の元旦、いつもとは違った登四郎の姿を見た。家族には俳句のことをあまり喋らなかつたが、新年早々熱気を帯びる姿は不思議にも思えた。前の年の秋に、亡くなる直前の波郷に会って結社を起すことを強く勧められ、年が新たになると同時に結社創刊の意思を固めた時でもあった。昔からの直接の弟子たちの何人かが他の結社に行っていて、その人たちに戻ってくるよう促す電話をかけていたようで、電話口の口調も熱がこもっていた。真つ赤な曼珠沙華、天のかぎりの青空、これは今まざに出帆していく心意気を詠んだ句である。



白桃をすすするや時も豊満に

『民話』昭45

登四郎は俳句人生で作家の成熟とは何かを常に問い続けていた。伝統文芸の系譜につらなるという強い自負と信念を持ち、つねに自己変革を促し、俳句の新しさを追求し続けなければならないと確信した時期でもあった。十月に「沖」の創刊号を刊行すべくその準備が始まった八月はいつもより暑い夏であった。登四郎は一月生まれであったが、夏の暑さが好きで自らのエネルギーを送る季節でもあった。上品で豊醇な香りをもった白桃をすするとしたたりと香りとがいつぱいに満ちひろがってくる。まさに豊満の時であった。

汗の肌より汗噴きて退路なし

『民話』昭45

登四郎は還暦の節目を前にした五十九歳。主宰誌をもつことを何年か悩みつづけてきたが、いよいよ「沖」創刊号の編集、校正と進む中登四郎はいよいよ追いつめられてもう一步も後に引けない瀬戸際に立っていた。これまで自分は「本当の俳句をいくつつくってきたであろうか、そして本当の伝統精神の継承者であろうか。」と、その反省と苦渋の中に自問自答しながらも「沖」創刊の意を固めた。結社誌を創刊するには決して若い年齢ではないことを承知しつつ、はつきりとした文学の主張をする場を持つこととなった。

蒼茫集



先のV字

甲州千草

石積

宮内とし子

花冷や卵白分くる小井

*釘抜きの先のV字に燕来る

花楓ほるほる風の向き変る

半田付けのわづかな煙万愚節

春疾風乗車位置よりずれるドア

昭和の日押入れすべて開け放つ

和みの色の

大川ゆかり

鐘の尾

田所節子

*ゆふぞらに和みの色の紫木蓮

木の芽風ぴんと張りたる帯の角

卒業子明日の約束してゐたる

うららかや花舗のやうなるちらし寿司

久々の煙草の香り月朧

青饅やもう母の事言はぬ父

岩を跳ぶ若鮎一匹つづ光る

流木の角のまるやか涅槃西風

若者を見かけぬ村の葱坊主

水温む赤き線引く北の地囃

*崩れの美見する石積蝶の昼

「痒いところ」美容師の間ふ目借時

*水皺のごと白魚の泳ぎをり

海を見て来し春塵のボンネット

花あせび鐘撞く間合ひ肩でとり

蔵町に鐘の尾をひく遅日かな

葱坊主離任の先生送りをり

花満開われを見てゐる別のわれ

余 生 千田百里

魚拓の目 能美昌二郎

而して源平桃の吐息かな
髪切らる音に目つむり春の昼
春愁やワインボトルの底の窪
遅桜子供はみんな学校へ
*残されしか余生か畝の葱坊主
竹秋を謳歌してをり藪不知

魚拓の目闇にみひらく春の雷
新しき未来を買へり苗木市
打ち起す土に鋤き込む春の風
*石投げて水おどろかす春の川
水上氏の逝去を悼む
逝く春を巻頭かざり旅立ちぬ
駄菓子屋の奥の暗がり春の昼

水の色 栗原公子

ハリーポッター 福島 茂

オーボエの音やはらかき日永かな
惜春やルーペに文字を太らせて
*水のいろ雲の色とも白魚は
さくら桜いくたり人を見送りし
春惜しむ野に茶を点てる遊びして
毒舌も魅力のひとつ山椒の芽

うららけし八坂を下り鴨川へ
腰越の港は小さし白子干し
手の中に匿ふごとく桜貝
耕せり手の感触を馴染ませて
*ハリーポッターぬさうな館鳥曇
「笑点」と合はず晩酌日永し

潮鳴集



木香薔薇

大沢美智子

白秋旧居花冷の暈かな
朧夜や紅茶に火酒を滴らせ
宗左近終焉の窓さくら濃し
著我咲いてゆきあひの空淋しうす
* ひらがなの会話に木香薔薇香る

初任給

佐々木群

* 四月来るむかし四桁の初任給
花筏切り分け水上バスの航
不機嫌な女房のやうに春の雷
鳥帰る飛行機雲は別れの賦
菜飯食ぶ小屋組高き土間の店

昭和の段差

井原美鳥

竜天に登り塵取はもとの位置
雨読てふ贅すこし得し取木に芽
遠き日の母も加はる蓬摘み
* そこここに昭和の段差家朧
漢字源部首人偏の項春蚊出づ

うららか

多田ユリ子

* さくら咲く空に原初のひかりかな
立て掛^{喜多院二句}けて雫する權初燕
うららかやどこか師に似し羅漢さま
三石の化し組てふさくらかな
さへづりの押し上げてゐる飛行船

飛鷹選評



能村 研三

羽田 着九州弁の春コート 仲里 貞義

九州が故郷の作者は、帰省などでよく羽田空港を利用されるのであろう。空港の到着ロビーで、九州弁を話す春コートを着た女性(?)に出会った。東京はまだ寒さが残っているものの、南国九州からは一足早い春が到来したようで、心が明るくなった。九州弁にも懐かしさと故郷への郷愁を感じた一瞬でもあった。羽田と九州の位置関係が巧みに詠まれている。

媚びること知らぬ馬の眼すみれぐさ くだうひろこ

くだうさんは青森の方なので、ここで詠まれた馬は下北尻屋崎に放牧される寒立馬であろうか。寒立馬は元々農用馬の一種で、長時間雪中に立ちつくす様が知られているが、その眼は人に媚びることがなく凛として遠くを見つめている。傍らにはすみれが可憐に花をつけていた。

この星のわれヒト科なり青き踏む 鈴木 基之

私たち人間を分類上に捉えると「ヒト科ヒト属ヒト」ということになる。普段、日常生活に追われせせこましい暮らしをしていると、こんなことを考えることなどないが、地球という一つの星に生まれた「ヒト」としての一人の人間を考えると宇宙規模から我々の姿を捉えることができる。野に出て緑の大地を踏みながら壮大な考えの中にいる自分であった。

啓蟄の貝がらきらり海女が畑 小形 博子

小形さんが住んでおられる館山では半農半漁を生業とされている方も多くおられるのだろう。海へ出て海女の作業の前に畑で作業をされる。実に働きものの海女さんたちである。海で採れた貝がらも畑に捨てたりもして、海も畑も一体となった生活を送られているのだ。

露の臺総ぶる義民の生家跡 木村あさ子

義民というと千葉県では佐倉惣五郎の話が有名だが、木村さんが住む青森県弘前にも義民の歴史がある。弘前の鬼沢村の農民一揆の指導者に藤田民次郎という人がいた。弘前藩の松前出兵による増税と冷害が重なり、庄屋らは同士を集め、農民と弘前城に押し掛けて強訴した。その生家跡を埋めるように露の臺が育っていた。

大銀嶺触先に捉へ眼張釣る 道端 齊

富山に住む道端さんはよく富山県の氷見に出かけて釣りをされるようだ。こちらあたりからは富山湾の大海原と水平線の彼方にそびえる北アルプス立山連峰の大銀嶺をバックにした絶景が見られる。雄大な景色を触先に捉え釣りをするのもさぞ気持ちが良いものだろう。

板の間の木目くつきり立夏かな 千葉 禮子

今日から夏だと思うと何とはなしに心が明るくなる。素足になつて板の間の感触も楽しみたくなる。改めて板の間の木目を目にすると何か落ち着きと安らぎを感じる。目から感じたものと素足になつて肌から感じたものが合わさつてその気持よさが増したのだろう。

沖作品



能村研三選

蔵まちの利き酒時の鐘霞む

埼玉

仲里 貞義

春風を切る二歳児のヘルメット

来賓の祝辞の途中亀鳴けり

どの町も自慢の桜ある日本

*羽田着九州弁の春コート

杣出しの馬が鈴振る春の泥

青森

くどうひるこ

*媚びること知らぬ馬の眼すみれぐさ

春北風や句碑のざらつく龍飛崎

春夕焼不老不死なるどろ湯かな

晴十方空に津軽の武者絵風

*この星のわれヒト科なり青き踏む

「法華経」と鳴く鶯や清澄山

煙突が絵になる伊万里柿若葉

風光る石より生まる野の仏

花は葉に去りゆく御代に迎ふ御代

神奈川

鈴木 基之

*啓蟄の貝がらきらり海女が畑

樹々芽吹く望郷募るこぬか雨

湾沿ひの列車眼下に初音かな

仁右衛門島へ櫓音の軽く水温む

老木の気魂の一枝初桜

春寒や鬼神社の鬼留守らしき

*路の臺総ぶる義民の生家跡

石仏は水難の子ら春吹雪

風荒し防波堤より恋の猫

鳥風に風待ち港祈禱寺

*大銀嶺舳先に捉へ眼張釣る

網目から溢るる燐光蛸烏賊

藁すべの真先きに燃えし目刺喰ふ

目借時床屋親父に生返事

数千生生物種棲む春の星

千葉

小形 博子

青森

木村あさ子

富山

道端 齊